

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-169	22-407	手稲溪仁会病院 白坂知彦 独立行政法人国立病院機久里浜医療センター松下幸生
題名 (原題/訳)		
Adjunctive Ketamine With Relapse Prevention-Based Psychological Therapy in the Treatment of Alcohol Use Disorder アルコール使用障害治療における再発防止に基づく心理療法とケタミンの併用について		
執筆者		
Meryem Grabski, Amy McAndrew, Will Lawn, Beth Marsh, Laura Raymen, Tobias Stevens, Lorna Hardy, Fiona Warren, Michael Bloomfield, Anya Borissova, Emily Maschauer, Rupert Broomby, Robert Price, Rachel Coathup, David Gilhooly, Edward Palmer, Richard Gordon-Williams, Robert Hill, Jen Harris, O Merve Mollaahmetoglu, H Valerie Curran, Brigitta Brandner, Anne Lingford-Hughes, Celia J A Morgan		
掲載誌		
Am J Psychiatry. 2022 Feb;179(2):152-162. doi: 10.1176/appi.ajp.2021.21030277. Epub 2022 Jan 11.		
キーワード		PMID
アルコール、ケタミン/エスケタミン、心理療法、物質関連および依存性の障害		35012326
要 旨		
<p>目的 初期のエビデンスから、ケタミンはアルコールからの断酒を持続させるために有効な治療法である可能性が示唆されている。著者らは、アルコール使用障害患者の禁酒を促進する上で、プラセボと比較したケタミンの安全性と有効性を調査した。さらに、ケタミンとマインドフルネスに基づく再発防止療法を併用した場合と、ケタミンとアルコール教育を併用した場合の対照療法を試験的に検討した。</p> <p>方法 二重盲検プラセボ対照第2相臨床試験において、重度のアルコール使用障害患者96名が、4つの条件のいずれかに無作為に割り付けられた。1) 毎週3回のケタミン (0.8 mg/kg i.v. 40分以上) 投与と心理療法, 2) 3回の生理食塩水投与と心理療法, 3) 3回のケタミン投与とアルコール教育, 4) 3回の生理食塩水投与とアルコール教育, である。主要アウトカムは、6ヵ月後のフォローアップにおける自己申告による禁酒日数の割合とアルコール再発の確認であった。</p> <p>結果 96名 (女性35名, 平均年齢44.07歳 [SD=10.59]) が intention-to-treat 解析に組み入れられた。治療に対する忍容性は良好であり、試験薬に関連する重篤な有害事象は認められませんでした。信頼区間は概念実証試験と同様に広がったが、6ヵ月後の追跡調査において、ケタミン群ではプラセボ群と比較して禁酒日数が有意に多く (平均差=10.1%, 95% CI=1.1, 19.0)、食塩水+教育群と比較してケタミン+治療群で最も減少した (15.9%, 95% CI=3.8, 28.1)。ケタミン群とプラセボ群では再発率に有意差はなかった。</p> <p>結論 本研究では、アルコール使用障害患者において、ケタミン3回注入による治療は忍容性が高く、6ヵ月後のフォローアップでは禁酒日数の増加と関連することが示された。また、ケタミン治療と並行して心理療法を追加することにより、有益な効果が得られる可能性が示唆された。</p>		